

陰鬱なチリの冬を彩る 連続テレビドラマ

北野浩一

●冬の始まり

チリの生活は、夏と冬で別物である。一〇月から二月の夏の間は、ほぼ毎日清々しい快晴が続き、午後八時すぎまで陽が残る長い夕刻の時間を、仕事帰りの大人はオープン・カフェやバルに集ったり、スポーツに興じたりすることができ、最高の季節である。なかでもクリスマス休みから二月末まで続くバカンス・シーズンは、家族で涼しい中南部の田舎に長期で滞在して、海や湖、山などの豊かな自然を楽しむ人が多い。

一転して、バカンスも終わって冬が始まる三月、気分は最悪である。天気は曇りがちになり、大気汚染はひどくなり、まわりは嫌な咳をする人だらけだ。毎朝、ぎゅうぎゅう詰めの地下鉄やバスでの通勤生活も再開する。追い打ちをかけるように、自動車税など税金や保険の納付、新学期を迎える子供の授

業料や文房具の出費もかきみ、大人にとっては頭の痛いことだらけである。チリでは、冬に入るとうつ病を患う人が増加し、自殺者数も増加する。頭痛薬と精神安定剤の広告が急に増えるのもうなずける。

●チリ人と連続テレビドラマ

そんな暗い気分の三月に、人々が唯一楽しみにしているのが、連続テレビドラマの開始だ。ラテンアメリカには、メロドラマ輸出大国が多いが、チリはどちらかというと地産地消型で、海外市場では無名に近い。しかし、国内娯楽における地位は揺るぎのないものである（参考文献①）。

チリの連続テレビドラマ（チリでは“Telenovela”、他のスペイン語国の“Telenovela”にあたる）は、合計放映時間が驚くほど長い。月曜から金曜日の午後七時半から

は期待するほど進展しないし、流れがわかってくれば、数回見逃しても話のストーリーを追うのには実はあまり困らない。

そのような密度が薄いストーリー構成でも、ここは重要、というところはある。例えば、ずっと謎になっていた実の父親が明かされる時、いよいよ浮気が暴露される時、殺人の真犯人がいつに明らかになる時など。そういう日は、街の人々の動きからすぐにわかる。いつもより早い時間の帰宅ラッシュ、先を急ぐ車のクラクション、そして番組が始まってからの街の静まり具合。だいたいにおいて、そういう日はオフィスでの会話も、テレビやラジオのトーク番組も、その話題で持ちきりだ。そして、次の日の同僚との会話は、「やっぱり、あいつが怪しいと思っていたよ」だとか、「あれは、自業自得だよ」とか、まるで共通の知人について噂話をしているような会話が繰り返される。チリ人にとって、テレビ連続ドラマは、隣人との価値観の共有を確認する縁であり、毎日の生活のなかの一部である。陰鬱な冬の時期を乗り切る活力源だ。

●熾烈な視聴率競争

―テレビ連続ドラマ戦争―

新番組の開始は三月からだ、視聴率争いの前哨戦は一月頃から始まっている。年が明けると、各局のCMの時間には、新ドラマの予告が頻繁に登場し、ニュース番組も使って制作過程が報じられたり登場人物がトーク番組に出たりと、局を挙げての応援体制が組み立てられ、人々の関心を掻き立てる。テレビ情報雑誌はもちろん、堅いイメージの新聞でも、脚本、演出、出演者など新ドラマについてさまざまな角度から頻繁にとりあげ、結果的には視聴需要を喚起する。

筆者が最初に驚いたのは、これだけ新ドラマの登場を宣伝しているながら、いつ開始するかという肝心なことが、放送開始の日、あるいはその数時間前にならないとわからないことである。新ドラマの視聴者獲得で、もっとも重要なのは、他局に先がけて最初にどれだけ多くの視聴者を獲得するかである。そのため、オープニングは、派手なキスシーンや肌の露出が多めの映像、やや衝撃的なシーンなどを使い、顧客の取り込みを図る。各局では、ドラマ開始前の番組で視聴率が最高になるところを狙って、突然抜き打ち的に初回を放映

する。出遅れた他局は、すぐに追隨するか、初回人氣が落ち着いたところに反撃する。このように、どの局が高い視聴率を獲得するか、というのは毎年この時期繰り広げられる一大イベントであり、「テレビドラマ戦争 (Guerra de Telenovelas)」という言葉も定着した。全てのテレビ局が同じ週に新番組を送り出す日本の状況を見慣れていると、チリのテレビ業界の混乱として片付けたくなるが、一方で、談合体質とは無縁の、市場競争の厳しさも垣間見える。

●とりあげられるテーマ

連続ドラマでは、歴史物も現代物もあり、場所の設定についても、首都サンティアゴもあれば、地方都市や農村部もある。しかし、主たるテーマは、家族の絆や友情の重要性がベースになっているものが多い。これに、やや濃厚すぎる恋愛シーンや不倫関係、妊娠、死別、裏切り、仕事上の問題などが被さり、飽きないストーリー構成になっている。最近では、二二時から成人向け時間枠を中心に同性愛や幼児性愛、家庭内暴力といったテーマも扱われるようになっていいる。チリはカトリックの伝統

が強く、保守的な価値観をもつ国であるが、それだけテレビドラマの世界では、簡単に視聴者の関心を高めることができる題材には困らない。登場人物が従事しているのは、果物生産、ワイン産業、サケの養殖業といったチリを代表する産業が多く、そこで働く人々の日々の暮らしが丹念に描かれたものは、企業研究をしている筆者には、とても興味深いものであった。所得階層は大富豪から貧困層まで含まれているが、言葉づかいの違いや相互の接し方は独特で、階級意識が強いといわれるチリ社会を垣間見ることができる。

一方で、とりあげないテーマとというのも興味深い。日本ではごく一般的な刑事モノは、チリでは極めて少ない。日本では警察権力は悪を裁く正義の味方、ヒーローとして描きやすいのに比べ、チリでは警察と市民は、長い軍事政権下では監視する側とされる側の関係にあったことを思い起こさせる。また、学校の先生などを主人公にした、いわゆる「センセイもの」もなく、師弟関係が日本で特に重視されていることに逆に気づかされる。

近年、チリでも女性の社会進出が拡大し、また勤務時間も長く

なっているため、夜八時台のテレビドラマを毎日見ることができるようも減少してきた。それを反映して、連続テレビドラマも、最も視聴率が高いのは、一〇時台に移ってきている。また、ケーブルテレビやインターネットといったメディアの多様化による視聴者の分散のため、かつてのように安定し四〇%超えの視聴率をあげられるドラマも少なくなっている。視聴者が分散することで、職場での朝のコーヒーの時間に、貴重な共通の話題を提供してくれていたテレビドラマが少なくなっているのは残念な気がする。

(きたの こういち/アジア経済研究所 企業・産業研究グループ)

《参考文献》

①Santa Cruz A., Eduardo, *Las telenovelas puertas adentro: El discurso social de la telenovela chilena*, Santiago: LOM Edición, 2003.

②Montenegro, Sebastián Andrés y José Ignacio Polidura, *Anuario Estadístico: oferta y consumo de programación TV abierta 2011*, Santiago: Consejo Nacional de Televisión, 2012.